

# To Forward

## ～前に向かって～

2024年2月2日

加中人権スローガン

「気づき・考え・行動する」

めざす学校像

「希望と笑顔あふれる楽しい学校」

今年度も、今月と来月の2カ月を残すのみとなりました。みなさんは、それぞれ学年で学んだことのまとめをする時期になりましたね。4月にめざした目標に近づくことができた人、様々な悩みでまだ途中の人、また目標を超えることができた人もいるでしょう。まだまだ人生は長いです。「継続は力なり」という言葉があるように、いい時も悪い時も日々続けることで、できるようになることは増えていきます。自分なりのペースを見つけて、来年度に向け準備ができるといいですね。

元日に起こった能登半島地震は、1月下旬にはボランティアの人々が現地でも活動を始められるようになりました。もうじき立春を迎え暦の上では春になりますが、被災地北陸地方はまだまだ極寒の日々が続き、被災した方々は寒さとの闘いも続いています。先月も「おわりに」の部分に書きましたが、私たちに何ができるかを考え、小さなことでもできることがあれば行動に移したいですね。

第41回全国中学生人権作文コンテスト 法務副大臣賞

### 「決断」

沖縄県宮古市立西辺中学校 3年  
上原 美春

人権なんてもの、この世に存在するのだろうか。長い間ずっと考えてきた。

小学校1年生の頃から、私は明らかなじめにあっていた。「死ね」「お前なんか居ない方がいい」そんな言葉を聞くのは日常茶飯事だったし、怪我を負わされる事も当たり前であった。先生や当事者同士の親を交えて話し合いをしても、母がクラス替えを頼み込んでも、容赦ないじめは大人の目の届かないところで姑息に続けられ、徐々にエスカレートした。幼い私は「辛いのは私だけじゃない、もっと酷い事をされている人が世の中にはたくさんいるんだ」そんな事を考えて、日々繰り返される攻撃から自分を守っていた。

大人の言う「辛いことがあればなんでも相談しなさい」なんて全くの綺麗事だと思ったし、人間が全員平等に生きられる世界なんてあるわけ無いと、そう思わないと毎日に耐えることができなかった。

小学校4年生のある日、一面に「死ね」と書かれた4枚の紙が私の机の上に置かれていたことがあった。そのひとつひとつ別の人が書いたようで、私が泣いている横でそいつらはクスクス笑い合っていた。張り詰めていた何かが切れたような気がして、この時私は「逃げる」ことを決めたのである。幸いなことに母が転校を許してくれ、更に様々な機関に掛け合ってくれたことであの苦しくてたまらなかった日常に一旦の終止符が打たれた。

逃げるという行為は、時に負けだとか、怠惰だとか、そういうふうにつまらなさがちだ。しかし、学校から逃げる。人との関りから逃げる。この選択は私を繰り返される物理的な痛みから解放してくれたし、日々感じていた生きることに絶望から押し上げてくれた。逃げたことで、明らかに私の人生

は前よりずっと明るいものになったと感じている。だから私は誰が否定しようとも自分のした選択を100パーセント認めてあげたい。あの時下した決断、そして周りに何を言われてもその決断を許してくれた母のお陰で私は今を生きることが出来ているのだと思う。

14歳になった今も私は、当時のいじめからくる恐怖から逃げ続けている。

いじめられさえしなければ、私も普通に学校に通えたのだろうか。いわゆる「青春」の時間を笑って過ごすことが出来たのだろうか。たまにそんな事を考えるけれど、あの時学校から逃げたことで学校にいるみんなとは違った経験が出来ていることも確かだ。大好きなピアノや絵画や詩作の時間を好きな時にとれる。普段なら関わりのなかったコミュニティの方たちとの繋がりもできた。全てあの時学校から逃げる選択をして、その決断を許してもらえてこそその経験たちである。逃げたことで変わろうと思えたきっかけもできた。初めて会う人に自分から挨拶をする。上原美春ですと、自己紹介してみる。小さいかもしれないけれど、私の中では前進の為の大きな一歩だ。

そして改めて人権を考えたとき、もしこの世に人権というものがあるとするのならば、それはひとりひとりの良い未来のための選択がどこかに受け入れられることではないかと思う。痛みに耐えるだけが美德ではないと私は心から訴えたい。

私をいじめた人達の心はどこか寂しかったのだろうか。家庭でなにかあったのかな、友達がいなくなるのが怖くて、自分がいじめられるのが怖くて、私に刃を向けていたのかな。そんな事を今になって思う。

いじめは決して許されることではないし、他人に自分のストレスをぶつけていいはずがない。ただ、今、その子たちの心の中にあつた暗い部分に触れられるとしたら、私をいじめなくてもそこから逃げられる逃げ道と一緒に見つけられるのではないかと思う。母がそうしてくれたように、その子なりの逃げ道を私は認めてあげられるのではないかと思う。

今の私の夢は、誰かの逃げ道を作れる人になること。母がしてくれたように、その人の選択を受け入れられる人になることだ。夢を叶えるために、法律を学びたい。その人がその人らしく生きられる道を一緒に探すことが出来るように、私は世の中の仕組みを知ってそれを活かせる仕事につきたいと考えている。

来年の春から、私は高校生になる。学校から逃げ続けている私は、3月、全日制の普通高校を受験するつもりだ。とても怖いけど、頑張りたい。高校生活の中で沢山選択の機会があるだろう。逃げたいと思うことも沢山あるだろう。けれど今、頑張れる気がしている。私には私の決断を最大限信じてくれる母がいる。そして私は、私が私らしく生きるための権利を確かに有しているのだから。

(原文まま)

はるか遠い昔、中学2年生だった私は重い心と身体を引きずりながら遅れて入った教室で、凍り付いた。赤いチョークで「死ぬ」と書かれた自分の机…私が座るはずの椅子もあるべき場所にはなかった。誰も私に気付かないふりをして、自分ではどうすることもできず、教室を出たところまでは記憶にある。実はそこからしばらくの間、どのように過ごしていたのか全く思い出せないが、ほとんど家で過ごしていたと思う。防衛本能と呼ばれるものなのかもしれない。冬が近づいてきていたある日、鍋をつついていた夕食時に、様子がおかしかった私に母が気づき、私は泣きながら学校で起こっていることを話した。不思議なことに、その日のテーブルクロスの色や自分が座っていた席の様子まで鮮明に思い出せる。普段は厳しすぎるほど厳しい母だったが、今回掲載した作文の著者と同じく、翌日仕事を休み学校に話に行ってくれた。もちろん、それで全てが解決することはなかったし、血は流れなくなったが大きな傷跡が私の心の中に残っている。

今回掲載した作文を読んで、40年近く前に自分が当事者として経験したことが今もまだ学校で起こっていることに心が痛む。この「いじめ」が差別、また世界中で起こっている紛争や戦争と同じく、「人の尊厳を奪う」ものであることを中学生のみなさんには理解してほしいと願う。